福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

幼・小・中学校と地域が一体となって子どもを育てる：美山町教育研究会に学ぶ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 忠五郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8388

幼・小・中学校と地域が一体となって子どもを育てる

美山町教育研究会に学ぶ

山下 忠五郎

はじめに

平成９年４月１日、幼稚園を併設する複式の小学校に新任の教頭として勤務することになった。自然豊かな山間にある足羽郡美山町下味見小学校（少子化による統廃合が行われ、今はその校舎だけが残っている。）である。待っていたのは、１９人の小学生と９人の幼稚園児、初めての複式授業、PTA の庶務・会計、地区各種団体の窓口、美山教研体育部長、子供会育成会担当などだった。

当時の町長さんのお話はいつも「教育最優先」から始まるように教育をとても大切にしていた。それぞれの地域では地域の学校を、町は全ての小・中学校をしっかりと支えていた。地域ぐるみで子どもを育てる、地域の子どもは地域で育てる文化が息づく町だった。

美山町には、平成 9･10 年度の 2 年間お世話になった。この 2 年間、それまでの 25 年間に経験したことのない経験をすることとなった。授業研究会（年 3 回)、連合行事（宿泊学習、修学旅行、校外学習、体育大会、水泳大会、音楽会)、複式の授業、国際理解教育、集合学習、子供会育成会と学校が一体となったソフトボール・卓球大会、町バス利用による負担軽減、毎年 1 回町内全教職員が優良校視察研修、中学生ボランティアが支える地区体育祭、おもてなしの溢れる感謝の集い、等々である。

この美山町の教育の中核となっていた組織が「美山町教育研究会」である。町内の全幼・小・中学校の教職員が参画する自主研究組織で、授業研究をメインとして連合行事や教職員研修など、具体的には上記のような教育活動の推進母体であった。

しかし、私は当時この組織があるという程度にしか理解していなかった。美山町を離れ、自らが管理職として学校経営に携わり、実践－振り返り（省察）－再構築－実践のサイクルを重ねたり、教職大学院で自らの実践を振り返ったりするなかで「美山町教育研究会」の存在がどんどん大きくなっていったのである。

本稿では、美山町教育研究会の研究実践記録「あゆみ」と関係者への聞きとりなどを通して「美山町教育研究会」誕生の経緯や沿革を調べ、その存在意義（価値）および「地域が一体となって子ども育てる」文化が生まれた背景をさぐってみたい。

なお、「あゆみ」は主に昭和 56 年 11 月 1 日発行の創刊号を参考にした。関係者は次の方々である。創刊号発行責任者（当時の美山町教育研究会会長）小嵐重郎右衛門氏、元羽生小学校長　笠松　悟氏、元美山町教育委員長　梅田秀彦氏、美山町最後の教育長　前川勝巳氏、元上宇坂小学校長（劇団ばばあず主宰）林　幸男氏、前和田小学校長　小嵐龍夫氏、第６代美山町長　藤田海三氏、羽生小学校長　松枝恵子氏

１．「地域をあげて子どもを、学校を支える」を見る

（１）体育大会

たいがいの地域がそうであるように、この町も体育大会は学校と地区が一体となって行われていた。地区民がこぞって参加し、秋の１日を楽しむのだ。ここで、私はそれまでには見たことのない光景 － 下味見地区の中学生全員で用器具の準備などの裏方を一手に引き受けていたのだ － に出合うのである。この町のどの地区でも、中学生が体育大会を支えているのである。中学生の働きぶりを見た子ども達には、中学生になったら自分が体育大会を支えるのだという意識が自然と育まれる。地域の大人達は、彼らに中学時代の自分を重ね合わせながら、たくましく成長した後輩達を温かく見守る。地域の子どもは地域で育てる文化が継承されているのである。

もう一つ初めて目にする光景に出会った。町長、助役、町会議員、教育長、教育委員長、美山中学校長が揃って会場に到着したのである。町長が代表して挨拶をし、小一時間ほど応援・激励をして会場を後にして行った。こうして、町当局、議会、教育委員会が美山町内６地区の体育大会を激励に回るのだという。ここにも、美山町が一体となって町を盛り上げ、学校を支え、子ども達を温かく見守る姿勢を見ることができるのである。

（２）収穫感謝祭などの学校行事

下味見小学校では、毎年秋、収穫感謝祭が行われる。地域の方々も楽しみにしている学校行事だった。子ども達は、「ふるさと学習」（総合的な学習の時間）で学んだことを発表したり、出店を出したりして地域の方々のおもてなしをするのである。保護者は焼き芋（子ども達が育て、収穫したサツマイモ）とおでん（各家庭で育てた大根や里芋など）でおもてなしを、地域の方々はお漬け物など各家々に伝わる料理でおもてなしをするのだ。子どもの、保護者の、地域の方々のそれぞれのおもてなしが健全で豊かな心を育てないわけがない。ここにも、地域ぐるみで子どもを育てる文化が根づいていたのだ。

収穫感謝祭で忘れられないことがもう一つある。ふるさと学習の発表で、２年生の男の子が原稿用紙２枚分の発表を原稿を見ずに発表したことだ。担任の先生はとっても心配だったようであるがやり遂げたのだ。家で、一生懸命練習したそうだ。地域の人たちの前で発表するということが、彼に必死の練習をさせ、原稿なしで堂々と発表させたのだ。

校内マラソン大会もしかりである。練習の時は、途中で歩くことのある子どもも、応援に駆けつけたお爺ちゃん、おばあちゃん、コース沿いで農作業をする人たちの前では走り通してしまうのだ。地域の人たちに見られていると、子どもは一生懸命になる。地域の眼差しが子どもの成長を後押ししているのである。

さらには、美山町が生んだ世界的洋画家豊田三郎氏、東河原に伝わる雅楽、地域の大先輩（お爺ちゃん、おばあちゃん）、木ごころ一座…等といった子ども達の成長を支えるひと・もの・ことが美山町には数々あったのである。

また、美山中学校では全員部活動制をひいているが、大会では何処でも美山中学校の応援団がひときわ目立ったと元美山中学校長で美山町最後の教育長である前川勝巳氏が述べている。学校を、子どもを温かく見守る風土が人一倍強い地域だったのである。

（３）美山町教育研究会

美山町の教育の中核となっていた組織が「美山町教育研究会」であり、町の「教育最優先」を具現化するコミュニティだった。美山町への赴任で初めて知ることとになった教職員の組織である。この組織を美山町は全面的にバックアップしてきた。

美山町教育研究会は、昭和 30 年２月の美山村誕生を機に「村内の児童生徒の教育向上と教員相互の融和を図る」

ことを目的として同年４月に発足した。具体的な取組としては、連合行事の実施と先進校視察であった。そして、昭和 48 年、美山町教育研究会は更なる充実・発展を遂げる。教職員の「美山町教育の発展にかける思いと専門職としての自己研修意欲」が次のような理想を掲げさせたのである。「町内の６幼稚園、６小学校、１中学校の学校の壁をなくして町内全教職員が研究主題をかかげて協力し合って研究し、実践し、その成果を毎年発表し合うことにすべきである。」（あゆみ，1981，P. ２）今、教育改革のなかで声高に叫ばれている幼・小・中一貫教育へと大きく舵を切ったのである。さらに、昭和 53 年からは共通の研究主題を掲げ授業研究を中心とした研究活動へと進（深）化していくのである。

このように、町内全幼・小・中学校の教師集団も美山町の子ども達の成長を期して立ち上がった。町当局、地域、学校と、地域ぐるみでの子育て体制が形成されていったのである。

２。「教育最優先」の町

(１)草･木･人

美山町第６代町長藤田海三氏（85 歳)。私が美山町下味見小学校に赴任当時の町長である。藤田町長の挨拶はいつも「教育最優先」で始まったことから分かるように教育をとても大切にしていた。また、「金は出しても口は出さん」とも常々口にしていた。

町政を司るにあたって、藤田町長は、「草・木・人」とう先人の教えを信条としていた。

「草」:今日、明日の生活を考える。田圃や畑の出来具合
「木」:20 年、30 年先の将来を考えること。木を植える
（かつては、山の木を切って嫁に出し、山の木を切れば家が建った）
「人」:100 年先のことを考える。人づくり

明日の生活が成り立たなければならない。近い将来の展望もなければならない。長期的な施策も必要である。この「草・木・人」の「人」が「教育最優先」という施政方針が生まれたのである。

「教育最優先」の方針の一方で、「金は出しても口はださん」も藤田町長が公言してはばからなかったことである。

この「金は出しても口はださん」は、勉強のできる環境を整えることについては精一杯のことをするが「学校（教育）は専門家の先生に任せる」という考え方である。町は学校をしっかり支えていくから、子どもの教育は頼むぞ!…というのである。町当局と教育委員会、学校、教員、さらには地域との信頼関係があったからこその施政方針だったのである。お互いに信頼し、それぞれの立ち位置で子ども達の豊かな成長を願って教育に携わっていこうというのである。

藤田海三氏は、学校を任せる教員について次のように述べている。

「人が人を育てる。子どもの持って生まれた素質を上手くつかんで伸ばしてやるのがよい先生。才能を引き出す能力、個性を伸ばす、性に合うことを伸ばす、そういったことに長けている先生こそが先生である。」と…。

「東大、京大の入学者数を…」とか「学力テストの順位は…」とか「不祥事や問題が起きると直接介入し、教育委員会や学校、教員を激しく非難する…」、「いじめが問題となると心の教育、道徳…といったように短絡的にその責任を学校に負わせる」といったように、この頃の首長さんは口出しすることが多くなってきたように思うのは私一人ではないであろう…。指示、命令と誹謗で学校は元気が出るのだろうかと心配しているのだが。

「教育最優先」の美山町のような信頼関係に裏打ちされた教育の推進こそが今求められているのではないだろうか。

（２)教育熱心な町

美山町 50 周年記念誌「美山 50 年のあゆみ」によると、美山町はとても教育熱心な町だという。「みやまの学校の歴史」からもそのことが伝わってくる。明治５年の学制発布から３年以内に６地区全てに小学校が創設されているのである。

下宇坂地区：市波小学校(本向寺に)、高田小学校、大久保小学校(乗泉寺に) → 下宇坂小学校
芦 見 地 区：芦見小学校（浄願寺に） → 芦見小学校
羽 生 地 区：大宮小学校 → 羽生小学校
上味見地区：中手小学校(民家を借りて) → 上味見小学校
下味見地区：私塾早川塾、折立小学校(称名寺に) → 下味見小学校
上宇坂地区：境寺小学校(法永寺に)、蔵作小学校(蓮生寺に) → 上宇坂小学校
（2006，美山 50 年のあゆみ，ｐ．142～144）

学制発布とともにお寺の境内や民家を借りて小学校教育が始まった。その後、合併を繰り返しながら尋常高等小学校、国民学校、小学校と名称を変え、昭和 22 年に中学校を併設、昭和 30 年からは小中学校となり、昭和 35 年に統合美山中学校が発足、１中６小学校体制となった。

さらに、平成 13 年、芦見・上味見・下味見・上宇坂小学校を統合し美山啓明小学校が開校、現在の１中３小学校となったのである。

明治初期の大変革の中でいち早く小学校を創設、中学校の統合、少子化による４小学校の統合など時代の変化に適切・迅速に対応し教育の充実・深化に努めてきたのであろう。こういった対応もまた教育を大事にしようという姿勢の表れであるといえる。

藤田海三氏が指針として掲げた「人づくりに一生懸命になるぞ…」が、美山町では明治の初めから始まっていたようである。

聞きとりに応じていただいた先生方（藤田海三氏以外全員元教員）は異口同音に「美山は教育に熱心で大事にしてきた」と言うのである。「歴代の町長は教育熱心で予算を確保してくれた。」「議員も学校をよく理解してくれた。」「町は惜しむことなくバックアップしてくれた。教育を大事にした。」…と。

地域住民もまた教育に熱心だったのである。昭和 64 年、ふる里の教員として地元美山に戻った小嵐龍夫氏は「住民の教育、学校に対する熱い思いや期待」をひしひしと感じ、「美山の子ども達を育てるという使命感」を持ったという。

地域が一体となって子どもを育てる環境は美山町教育研究会の歴史と共に構築されていったようである。

３．美山町教育研究会とは…

（１)美山町教育研究会会則

第　１　条　本会は美山町教育研究会と称する
第　２　条　本会の事務局は会長の勤務校に置く
第　３　条　本会は町内の教育の向上発展を図るを目的とする
第　４　条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う
　　１　教育研究会（小教研・中教研）
　　２　各種講習会

３　研修旅行
４　各種競技会（児童・生徒）

第　５　条　本会は美山町に勤務する教育職員（幼稚園・小学校・中学校）をもって組織する。

第　６　条　本会には下記の役員を置く
会長　１名　　副会長　１名　　常任理事　１名　理事　各校代表　２名
校長及び教頭　１名　　一般職　１名（但中学校　２名）
研究推進委員（各校の研究主任をあてる）

第　７　条　会長　副会長は理事会において選任し　総会の信任を受ける

第　８　条　会長は会を代表し　会務を総括する　副会長は会長を補佐し会長事故あるときは会長の職務を代行する　常任理事は会の庶務会計を掌る　理事は理事会を構成し事業計画・予算その他必要な議案を作成する　推進委員担当理事は美山の教育研究の推進にあたる
第４条第１項については　各教科・各分野の２・３を重点的に研究し　他の研究部は各校の教科主任をあてる　重点教科は年度により選択する　第４条第４項の実施は部長を中心に行う研究部会に直接はいらないものは会長の依頼により学年会等にて実施する

第　９　条　役員の任期は１ケ年とし毎年４月に改選する　但し再任を妨げない

第　１０　条　本会には次の会議を開く　会の招集は会長が行う

第　１１　条　総会は次のことを行う
１　会則の審議　　２　事業に関すること
３　予算・決算の承認　　４　役員の信任

第　１２　条　本会の会計年度は毎年４月１日に始まり３月 31 日に終わる

附　則　　本会則は昭和 48 年４月 14 日より施行する
（昭和 51 年度一部改正）

※研究実践記録「あゆみ」では、「昭和 49 年に新たな計画を立てたため規約の一部改正をした。」とある。
※聞き取り調査では、「昭和３０年の研究会発足時に規約があった」ようであるが、確認された規約は、昭和４８年４月 14 日施行のもののみである。

（２）美山町教育研究会の沿革

年　月	美山村(町)教育研究会	美山村（町）の動静
S30・2		美山村誕生（人口 9333 人、戸数 1788 戸）
S30・3		初代村長　豊田大門氏　就任
S30・4	美山村教育研究会　発足 目的：児童生徒の教育向上と教員相互の融和 事業:連合行事の実施、先進校視察研修	
S32		2 代村長　泉田和志氏　就任
S33		「教育審議会」設置 児童生徒の学力を高めるための調査・研

		究を行い、村長に答申する組織（11 人で構成）
S35		3 代村長　真杉文右衛門氏　就任 美山中学校創設
S36	町内６小学校が連合で修学旅行	
S37		美山中学校開校式
S38		三八豪雪 籠谷雪崩:芦見小児童･教師 4 名犠牲
S39	町内６小学校３年生が連合で町内見学	町制施行、美山町新庁舎完成
S40	町内６小学校４年生が連合で福井市内見学 町内６小学校５年生が連合で海浜学習、林間学習、幼稚園が合同遠足	
S45	第 1 回小学校連合水泳大会　開催	
S46	第 1 回小学校連合体育大会　開催	
S47	第 1 回子ども会ソフトボール大会　開催 へき複三校協同学習始まる	4 代新町長　上都彌左エ門氏 就任
S48	美山町教育研究会会則　施行	
S49	富山県福光町を視察訪問 教育研究の基盤整理 美山町教育研究会規約の一部改正 教育研究計画の策定、教育研究室の設置、研究組織の再編	
S50･8	第 1 回美山町教育研究集会（於開発センター）	
S51･8	第 2 回美山町教育研究集会（於開発センター）	
S52･8	第 3 回美山町教育研究集会（於開発センター）	
S53	研究方針を改める ①自主研究集会：11 月上旬、会長校で開催 ②公開授業を通して研究成果を実証する ③指導助言者を招聘し年 3 回の指導を受ける 奈良女大附小　倉富宗人氏、千代　宏氏 第 1 回子ども会卓球大会　開催	
S52･11	昭和 55 年版「あゆみ」発行（以後、毎年発行）	
S58	指導助言者 十文字女子短期大学教授　石田佐久馬氏招請	5 代町長　貴志精義氏　就任
S61	指導助言者　有終東小学校長 木下昭夫氏招請	美山町新庁舎完成 名誉町民前田又兵衛氏と前田建設(株)寄贈
S63	協同学習から集合学習へ名称変更	
H 元	指導助言者　県教育研究所長 東出市二郎氏 招請	

H4	指導助言者　県教育研究所長 内藤保夫氏 招請	下宇坂小児童 14 名、ワシントン州ウッドサイド小学校でホームステイ
H5		6 代町長　藤田海三氏　就任
H6	指導助言者　佐々木考章氏（勝山市）　招請	
H9		町民劇団「木ごころ一座」旗揚げ公演
H10	統合される 4 校での集合学習（～H12）	芦見、上味見、下味見、上宇坂 4 小学校統合を決議
H12	集合学習が終わる	美山ふるさとスケッチ大賞始まる
H13		美山啓明小学校（統合小学校）　開校 7 代町長　有塚達郎氏　就任
H16		福井豪雨
H17	福井市合併に伴い、美山町教育研究会から「美山教育研究会」へ名称変更	福井市、清水町、越廼村と合併 福井市へ
H18		閉庁式 人口　5,108 人

※美山町教育研究会編集の研究実践記録「あゆみ」及び、美山町 50 周年記念誌「美山 50 年のあゆみ」（平成 18 年 1 月発行）から抜粋したものである。

※「あゆみ」は、昭和 56 年 11 月 1 日に発行された昭和 56 年度版が最初で、以降、毎年度発行されてきた。草創期の美山町教育研究会については、昭和 56・57 年版で詳細に述べられている。

（３）美山町教育研究会の変遷

ａ．美山町教育研究会の発足

昭和 30 年 4 月発足。昭和 30 年 2 月、下宇坂、芦見、羽生、上味見、下味見、上宇坂の 6 ケ村が合併し美山村が誕生、そして、同年 4 月、美山町教育研究会が発足した。

目　的　　児童生徒の教育向上と教員相互の融和を図る

内　容　①児童生徒対象とした連合事業の実施

②教職員を対象とした先進校の視察研修（授業日に実施）

連合事業
①水泳大会(小 5・6 年)
②小学校連合体育大会(4 年以上)
③音楽会(小・中合同)
④写生会・競書会(小・中生全員)
⑤美山町内見学(3 年)
　福井市内見学(4 年)
⑥修学旅行

ｂ. 教育研究へ － 自主教育研究体制づくり －

昭和 48 年度 － 研究組織の再編－

美山町教育研究会理事会は研究組織の再編成に取り組むことを決めた。この決断にいたるには、次のような教職員の声があったからだという。

「美山町という地域社会の実態にあった児童生徒の教育をどのように進めたらよいかについて研究し、その学習指導方法を幼稚園・小学校・中学校と一貫したものにすべきである」（あゆみ，1981，P. ２）

こういった声は、「教職員の教育研究は福井県幼稚園教育研究会に幼稚園に勤務する職員が所属し、福井県小学校教育研究会に小学校教員が所属し、福井県中学校教育研究会に中学校教員が所属してそれぞれの教科領域に各教員が参加して研究するシステムがとられている。組織としてはよく整った形になっているが実際は各研究部が弱小であり、研究発表は県教育研究会から研究教科も研究テーマも決められ、それにもとづいて発表させられた。した

がってその研究も発表のための研究に終わることと、継続研究はなされず一年限りのもので研究したことが児童生徒に反映することなしに終わることが多い」（あゆみ，1981，P．２）ことに対する不満から生まれたのであった。

そして、「町内の 6 幼稚園、6 小学校、1 中学校、それぞれの学校のかべをなくして町内全職員が研究主題をかかげて協力し合って研究し、実践し、その成果を毎年発表し合う」（あゆみ，1981，P．２）研究組織に再編成することとなったのである。

こうして美山町教育研究会は幼・小・中が一体となった教育研究へと大きく舵を切っていったのである。幼・小・中が一貫した学習指導方法で子ども達を育てようという取組であった。

昭和 49 年度 － 教育研究の基盤整備 －

まず、教育研究の構想にあたって、福光町学校教育研究会（現富山県南砺市）を視察。そして、次のような計画（構想）を立案した。

＜教育研究計画＞

①研究対象団体は町内の幼稚園・小学校・中学校のすべてとする。

②各校より１名の研究推進委員を選び、同委員会を構成して研究の推進にあたる。

③美山町教育の長期の展望にたって、研究の主題を作成する。各校はこの主題にもとづきサブテーマを作成して主題解明にあたると共に、児童生徒の教育の向上に寄与する。

④毎年１回、この研究団体の研究成果を発表する。その時期は８月の夏季休業中に実施する。その会場を開発センターとする。

＜教育研究室の設置＞

①町教育委員会に依頼して教育研究室を開発センターに設置し、推進委員会を始め各種の研究会会場、調査研究等のセンターとする。

②町内教育団体の毎年発表される研究物を保管し、教育研究の資料とする。

③教育研究に必要な参考図書を購入して学習指導法の改善にあたる。

④管理運営の責任は研究会長事務局があたる。

昭和 50 年度 － 研究集会始まる －

新たな研究体制のもと、研究成果を発表する自主研究集会が始まった。

次の資料は、第 3 回美山町研究集会の開催要項である。教育研究所、福井大学、仁愛短大などの先生方を講師に３つの分科会に分かれて研究協議が行われた。

主　催　　美山町教育研究会
後　援　　美山町教育委員会
期　日　　昭和 52 年 8 月 27 日（月）
会　場　　美山町開発センター
参加者　　美山町幼稚園、小学校、中学校
日　程　　9:00～9:30　受　付
　　9:30～10:00　全体会
　　10:00～11:00　分科会
　　11:30～12:30　昼食
　　12:30～ 1:00　分科会報告
　　1:00～ 1:30　アトラクション　曲太鼓　美杉太鼓
　　1:35～ 3:00　講演　講師　福井県教育研究所　吉田一雄先生
　　演題　たくましい子の育成について
分科会　　第 1 分科会　テーマ　自ら学んでいく子どもを育てる学習指導の探究
　　助言者　長谷川守男先生（福井大学）
　　司会者　高島喜一郎教頭（美山中学校）
　　発表者　中島教諭（上宇坂小）　前川教諭（美山中）
　　参加者　下宇坂小、上味見小、上宇坂小、美山中
　　第 2 分科会　テーマ　ひとりひとりの個が伸ばされる集団学習の確立
　　助言者　関口　昇先生（福井大学）
　　司会者　梅田秀彦教頭（上味見小）
　　発表者　吉田教諭（下味見小）　武田教諭（羽生小）
　　参加者　下味見小、芦見小、羽生小
　　第 3 分科会　テーマ　子どもの考える力を伸ばす学習指導の探究
　　助言者　谷出千代子先生（仁愛短大）
　　司会者　中川恭子教諭（下宇坂幼））
　　発表者　島田教諭（上味見幼）
　　参加者　下宇坂、芦見、羽生、下味見、上宇坂　各幼稚園

ｃ．美山町教育研究会の進（深）化

昭和 52 年度 － 研究のあり方の見直し－

児童・生徒の健全な成長を願い幼・小・中が一体となった教育研究体制づくりを始めて 5 年、自主研究集会を開催すること 3 年、研究推進委員会や理事会において毎年改善してきたが思うような研究の深まりが見られず会員の満足感も得られなかったようである。これまでの研究のあり方について討議を重ね、新たな方針を決めた。

＜振り返り＞

①8 月に研究発表会を開催したのでは、4 月から僅か 4 ケ月しかなく単位学級での研究が充分なされないのでその成果があがらない。

②研究発表会は研究した内容を発表するのみで、児童生徒にどのようにおよぼしているかその実態がつかめない。

③年 1 回の発表会のみに指導助言を受けるのでは効果がないことと、多くの助言者の指導ではややもすると指導法の一貫性を欠くおそれがある。

といった振り返りから、次のような方針のもと研究を深めていくこととしたのである。

①研究発表会の期日を 11 月上旬頃に遅らせ研究の充実を図る

②会長所属の学校を研究推進校とする。研究集会は推進校で行う。授業を公開し、研究の成果が授業の中でどの

ように生かされているかを実証する。

③指導助言者として奈良女子大学附属小学校　倉富宗人先生、千代宏先生を招聘する。年３回指導を受ける。

１年以上にわたる協議の結果示された研究方針は、指導助言者を招請するという新たな局面へと踏み込んでいくことになったのである。

指導助言者に奈良女子大学附属小学校　倉富宗人先生、千代宏先生を選任したことについて、小嵐重郎右衛門、笠松悟両氏の回想によると

一つには、当時、倉富氏は大野郡和泉村で指導していた。その和泉村での研究会に招かれて倉富氏の「学び方学習」に出合い、感銘を受け、美山の教育に必要と判断した。

二つには、教育研究基盤整備にあたって、美山教研の全理事が富山県福光町を視察訪問したことは先に記した通りであるが、その福光町に倉富宗人氏が指導にはいっていたこと。

などが招聘の背景であった。

小嵐氏は、倉富氏から学んだことは「丁寧な授業」と「待つ姿勢」だったと振り返っている。また、倉富氏は「美山に惚れ込んで」来てくださったようである。

倉富先生について、「あゆみ」創刊号には次のようなエピソードが載っている。

「前日夜、倉富先生には上宇坂小学校宿直室にお泊まりになり、学校関係者、教委関係、ＰＴＡの方々が先生と膝をまじえ、親しく打ちとけて教育論を拝聴できた。先生好物のわさびを蔵作の山からＰＴＡの方がとってきてくださったので、そのわさび、わらび、じゃがいも等の山野の素朴な味を喜んでいただいた。

深夜、先生が起き出されて一心に翌日の教材研究をしていらっしゃるお姿には頭が下がったものである。」

（あゆみ，1981，P．57）

倉富氏は、昭和 53 年から 57 年の５年間、示範授業や研究会の指導・助言などを中心に美山町の教育と深く関わったのである。

倉富氏は「学び方学習法」の提唱者である。そして、この「学び方学習法」は全ての教科に通用する学び方で、「主体的に学ぶ」「自ら学ぼうとする」子ども達を育てる学習法である。と林幸男氏は述べている。

美山町教育研究会は、この「学び方学習法」を授業研究の柱として実践研究を進めるのである。

昭和 58 年度以降も指導助言者は倉富先生の考え方を継承する先生方が招聘された。石田佐久馬氏（十文字女子大学、福井県出身）、木下昭夫氏（大野市有終東小学校長）、佐々木孝章氏（勝山市平泉寺）の各氏であった。

ｄ．研究主題を設定し学習法研究５カ年計画が始まる

美山町教育研究会にとってこの昭和 53 年度はターニングポイントの年度といってよいのではないだろうか。研究主題の設定、授業公開、指導助言者の招聘、示範授業、学び方学習など研究がダイナミックに展開し始めたのである。現在にまで続いている美山教研の研究体制が確立した年度でもあったといえるのである。

①研究主題　　協力して自ら学んでいく子どもの育成

②主題設定の理由

激動する現代社会に生き、時代を創造していく子どもの姿は「自主性と協力性に富み、豊かな情操とたくましい実践力のある人間」と考えられる。

このような子どもを育成するには、学校の主体をあくまで子どもにおき、子ども自らの力で根気よく学習をすすめていくようにしなければならない。また、集団の力を生かしながら育てていこうとする意識を高め、おたがいに協力し合うことによって自己が磨かれることを体得させねばならない。

自主・協力・創造と情操の融和を人間教育の基本とし、そのための的確な学習指導の方法を確立することが私た

ちの共通した課題である。（あゆみ，1981，P．８）

５カ年の研究のあらまし（あゆみ，1983，P．１～２）

＜昭和 53 年＞

「自ら求めていく力を育てるための学習法のあり方を求めて」（５カ年計画のテーマ）を掲げ、自ら求めていく力を養うために、一人ひとりの表現力（各・読む・話す）が大切であるという共通理解のもと、書くことにより意志の集中力を養い、正しい判断力を培おうと学習法の研究に取り組んだ。授業研究を軸として授業記録による学習法のあり方が追求された。また、「学び方学習」の実践家である倉富先生の示範授業を機にして書くことによる学習法がより深く解明され、研究が本格的に始動した。

＜昭和 54 年＞

「学び方学習」の指導法を求めて、書くことを育てるための実践的研究をすすめた。何を書くか、どのように書くか、いつ書くかなどが課題であった。書くことにつながる学習活動、すなわち視写・聴写・作文・読書感想文・わかったこと、調べたことを書く・学習後の感想（きょうの学習で）を書くなど段階的に書く力を育てる実践を積み重ねていった。

＜昭和 55 年＞

書くことには慣れてきたが、豊かな表現力はどうするか、内容の深い文章をどう書くかなどが中心課題となった。また、ひとり学習と共同学習の関連についても研究にも取り組んだ。さらに、従来の示範授業による授業研究に加えて会員の公開授業による授業研究も行われた。

＜昭和 56 年＞

書くことになれ、抵抗もなくなってきたが、語彙・語句が不足しているために豊かな表現ができないということが指摘され、その反省にたって国語科にしぼって「語彙・語句を豊にする指導のあり方」を重点課題とした。また、公開授業の事前研究会も定例化した。

＜昭和 57 年＞

みがき合う学習をめざして、学習の基本である国語と算数の学習指導で、ひとり勉強のやり方、ひとり勉強でやったことを共同学習の場でどう深め豊にするかに取り組んだ。

５カ年の研究のあらましから見えてくることは、毎年実践を振り返り、次の年は明らかになった課題の解決に向かっていることである。今、福井大学教職大学院が大切にしている「実践－省察－再構築－実践」を彷彿させるものではないだろうか。

美山町という地域社会の実態にあった子ども達の育成という使命感、美山町教育の発展、教職員の専門職としての自己研修意欲が前年の振り返りから新たな挑戦へと向かわせたのであろう。

実践の中核は「書くこと」「学び方学習法」「ひとり学習」「共同学習」であった。

(４)研究主題 － 協力して自ら学んでいく子どもの育成 － について

昭和 53 年度から一貫して「協力して自ら学んでいく子どもの育成」をめざして研究を進めてきた。「子どもの育成」が「児童・生徒の育成」へ、そして、現在は「園児・児童・生徒の育成」へと文言の一部が改められてきた。しかし、基本的には「協力して学ぶ力」「自ら学ぶ力」の育成が本研究会発足当時から貫いてきたテーマである。

「幼・小・中が系統的に一体化し、それぞれの学校が各校の特色を生かしながら実践研究に努力している。協力して自ら学ぶ児童生徒の育成を研究主題にサブテーマとして表現力を高める指導法を共通研究課題にかかげ取り組んできた。授業研究に特に力を入れ、６月の示範授業を皮切りに、各学校で月１回は必ず授業研究会を持ち、10 月には全員参加の公開授業研究会を実施し、美山教研の研究主題が授業の中でいかに生かされ定着しつつあるかを

確かめ合った。」（昭和 58 年美山町教育研究会長　　多田晴浪氏）

このように、美山町全幼・小・中学校共通の研究主題とサブテーマのもと、各校の実態の応じた研究テーマを掲げ実践研究に取り組んできたのである。

研究主題はこれまでに幾度か検討されてきたが、今日まで不変の研究主題として掲げられているのである。このことについて、平成 10 年美山町教育研究会長花弥清一氏は平成 10 年度「あゆみ」のあとがきで次のように述べている。

「今の研究主題の「協力して」「自ら」の精神は、これまでも、またこれからも大切な教育理念であり、主題そのものは変えないで、主題設定の理由を明確にすると共に、重点項目や研究推進の方策の中で、今日的課題や総合的学習を視野に入れた取組を具体化することとなった。」

平成 10 年といえば新学習指導要領、総合的な学習の時間、完全学校週５日制など学校教育が大きく変わろうとしていた。こういったことを念頭に議論を重ねたうえで「主題は変えない」との結論を得たのである。美山教研は、「協力して自ら学んでいく子どもの育成」を今日まで一貫した研究主題としている。

当時（平成 10 年）、私は下味見小学校に勤務していた。下味見小学校の研究主題は「互いに協力し合い自ら学ぶ感性豊かな子の育成」であった。「総合的な学習の時間」の新設が打ち出されたことを受けて、子ども達の主体的な活動が期待できる総合学習に全校あげて取り組んでいた。「地域の素材を生かした総合的な学習－下味見の宝さがし－」であった。

（５）研究実践記録「あゆみ」の発行

「あゆみ」創刊は昭和 56 年 11 月１日である。その目次は次のようになっている。

目　次　　発刊に寄せて……美山町教育委員会教育長　山　下　五　生
　　あいさつ……美山町教育研究会長　　小嵐重郎右衛門
　　１．研　究　主　題
　　Ａ 研　究　主　題
　　Ｂ 主題設定の理由
　　Ｃ 研 究 の 観 点
　　２．主題設定に至るまでの経過
　　Ａ 美山町教育研究会のおいたち
　　Ｂ 教育研究への道
　　Ｃ 教育研究集会の開催
　　Ｄ 過去３ケ年の研究の反省と次年度への展望
　　３．研究機構
　　４．三ケ年の研究のあらまし
　　Ａ 53　年　度
　　Ｂ 54　年　度
　　Ｃ 55　年　度
　　５．昭和 53 年度の研究
　　Ａ 研究の重点
　　Ｂ 研究経過

C 各校の研究
D 講師の助言
E まとめ　　※昭和 54･55 年度についても同じ項目で研究内容が記載されている。

「あゆみ」は、昭和 53 年度から今日まで毎年刊行され続けている。町単位で研究実践記録が刊行され続けていることは稀なことであろうと推測されるが、どういった経緯からこの「あゆみ」が刊行されたのだろうか…？その理由・背景をさぐってみた。

まず、発刊の目的は「実践記録を残す」ことと「教員の実践力を高めるー力をつけていこう」ということであった。また、当時「高志地方教育員会連絡協議会」（足羽郡、吉田郡、両郡内の教育委員会の共同体）が発行していた「高志の教育」、「高志の子ら」の影響も受けたようである。

しかし、その背景にはより大きな力が作用していたのである。それは、指導助言者として招請した倉富宗人氏の「記録に残し、それを足場に成長していく…」という考え方であった。笠松悟氏に「倉富先生は教育の真髄をついた先生である」と言わせた倉富先生の教育理念が強く影響していたのである。

美山町教育研究会の実践記録「あゆみ」は、福井大学教職大学院のカンファレンスや集中講座のレポート、長期実践報告などと重なる部分があると思えてならないのである。

参考までに、倉富先生の示範授業記録の一部を掲載しておきたい。

授業記録（示範授業）　三年　国語　「みつばちのダンス」
昭和 53 年 5 月 20 日　下宇坂小学校　授業者　倉富宗人先生

T　教科書の字の大きさで書いてください。
教科書 P48 の学習のめあて
「だいじなことをまとめながら読もう。」　板書
勉強していく順序を言います。
１．通し読み　板書
文章を読むときは、できるだけ一気に読むことが大切です。
通し読みのめあて
「みつばちのダンス」を読むと、７つに分けてあります。
「大きく分けるとどうなるかな。」　板書
「だいじなことを書き出しながら読もう。」
①②③については、列順におはなししてもらいます。
２分間ぐらいで読んで下さい。
C　読む
T　三つに分けるとどうなりますか。
C_1　①から①の終わりまでだと思います。
C_2　ぼくは②の終わりのところまでです。
C_3　私は、③から⑦までの終わりのところまでだと思います。
T　一の文は、どんなことが書いてありますか。
C_4　問題が書いてあります。

T　②のところは、
C_4　学者の……。
T　本文を読んで、学者が考えたことといったらどうでしょう。
②　学者が考えたこと　　板書
長文では、どんなことが書いてあるかということは、むずかしいが大切なことです。
T　③はどうですか。
C_5　学者がみつばちのことを観察したことです。
T　観察だけかな、先生はこう考えます。
③～⑦　学者が観察したこととわかったこと。　板書
T　いよいよ今日のめあての勉強にはいるよ、だいじなことばをえらんでみよう。
一の文からだいじなことばをえらぶとどうなるか。なるべく少ない方がよい。
(中略)
T　なる程、ひとりひとりちがってもいい。先生はこう思います。先生だけのものです。
花畑のことばをえらびます。　　板書
たくさんのみつばちがつぎつぎと　　板書
一ぴきのみつばち　　板書
この三つのことばをえらびました。この三つのことばはだいじなことばで、つながりがあるので
→　でつなぎます。だれかまだだいじなことばをいってくれたね。
「何分かして」　　板書
まとめよう。ふろしきのようにつつんでみよう。これを「読みとり図」といいます。
(中略)
T　もっと短くできないか「ダンスでエサのある場所を教える」　　板書
これだけでもいいかな。もうこれから先は、自分で読み取り図を書ける人。
C全　挙手なし
T　もう少し先生とやりたい人。
C全　全員挙手
T　これからは、自分の二本の足で、二本の手で、二つの目で進んでいきましょう。今、書いているのはどんどん書いてきましたから、もう一枚の紙にきれいに読み取り図をまとめて、みんなと比べてください。どんなふろしきにどこでつつんだらよいか、楽しみながら比べることができると思うのです。

「あゆみ」には、こういった示範授業や各校の実践例、実践に対する指導者の助言などから学び、「力をつけていこう」という美山町教育研究会の教師集団の熱い思いが詰まっているのである。

昭和 57 年度版「あゆみ」では、今後の課題(教師の姿勢について)として次の２点をあげている。「教師自身が、考える、・書く・読むこと、自ら学んでいく姿勢を更に強力なものにしていくことである。」「個人の問題をみんなの問題として研究し、進みつつある教師となる努力をしていきたい。」

これは、美山町教育研究会の先生方の「子ども達が今後更に大きく育っていってほしい」という願いの実現のために、自らの教員としての力量形成に積極的の取り組んでいたことを窺い知ることができる振り返りである。

近年、教育界で課題となっている「教員の力量形成」が、美山町では幼・小・中が一体となって全教員で自主的に取り組んでいたのである。

４。美山町教育研究会の先見性

（1）その１ ― 地域ぐるみで子育て

昭和 30 年２月、２郡（足羽郡、大野郡）６村（下宇坂、上宇坂、芦見、羽生、上味見、下味見）が合併し、人口 9,333 人、戸数 1,788 戸の美山村が誕生した。（下宇坂・上宇坂は足羽郡、芦見・羽生・上味見・下味見は大野郡）しかし、役場事務所移転につき分村問題がくすぶり続けたのである。分村問題は、昭和 33 年 10 月、当時の福井県知事羽根氏の調停により収束を見るのである。

藤田海三氏によると、分村問題で初代村長、２代目町長ともに一期ももたずに辞任に追い込まれたという。それほどに合併は難しかったようである。

こういった合併に伴う諸課題を抱えた状況の中、昭和 30 年４月、児童生徒の教育向上（学力向上）と教員相互の融和を図ることを目的として美山村（町）教育研究会が発足した。

＜美山村（町）教育研究会立ち上げの理由・背景＞

足羽郡の下宇坂、上宇坂と大野郡の芦見、羽生、上味見、下味見が郡境を越えて合併。2 郡 6 村の合併であり、郡による違い、村による違い、それぞれの郡、村で異なる教育方針、異なる学校文化の学校が新たな美山村の教育をすすめていくためには共通理解が必要。「異なるものを一つにしていく」ため、「美山村としての教育方針を決める」ために研究会を立ち上げた。

一方で、「合併に伴う課題解決」という目的もあったと笠松、小嵐両氏は口を揃えた。

一つには「融和」であった。研究会発足当初は、連合行事の実施や教員の視察研修が中心であったというのも、子ども達も先生方も「まずは仲良くならなければ…」ならなかったからである。子ども達・先生方の融和、学校間の融和、それが町民の融和につながる。「町民が仲良くならなければ…」町も学校もうまくいかない。

二つには村民意識の醸成であった。２郡、６村の合併だったので「住民意識」が大きく違うため、美山村民という意識を作る必要があった。「子どもを育てること」「学校がまとまること」を通して一体感を醸成していこうという思いがあったという。子どもが同じ土俵に乗るということは親も同じ土俵に乗ることになるのである。

美山町教育研究会は「異なる文化」を融合し「新しい美山の文化」を作るという側面も担っていたのである。そして、こういった美山町教育研究会発足時の取組に、「幼・小・中と地域が一体となって子どもを育てる」体制のルーツを見ることができるのである。

「地域ぐるみで子育てを…」「地域との連携」「幼・保・小・中の連携…」など、喫緊の課題として全国的に取り組まれていることが美山町では合併という地域の存亡をかけた「村づくり」を通して体制が整えられたのである。

（2）その２ ― 幼・小・中一貫教育

昭和 48 年から 49 年にかけて、美山町教育研究会は幼・小・中が一体となって教育研究へとシフトしていったのである。幼・小・中が一貫した学習指導方法で子ども達を育てようという取組である。

小嵐氏の言をかりれば、「どうにかして美山を前進させよう」「美山の子を育てんことには…」という一途な思いが「命がけ」で授業研究＝指導方法の刷新に向かわせた。具体的には、子ども達に力をつける、学力向上、実践力を高める、人材育成であった。

笠松氏によれば、美山教研が教育研究へとシフトするにあたって先進地視察として訪問した富山県光町には、後に美山教研の指導者として招聘する倉富宗人氏が指導に入っていたことも影響しているというのである。倉富氏の考え方は「中学校だけではダメ、小学校だけでもダメ、幼稚園から始めなければならない」、つまり幼・小・中が一貫した学習指導法で子どもを育てなければならないというものであった。

昭和 53 年、再び大きな転機が訪れるのである。研究の深まりが実感できず、会員の満足感も得られず、再度研究のあり方が議論されたのである。そして示された方針は、研究発表会の期日変更（８月→11 月）により研究の充実を図る、研究集会は授業を公開し研究成果が授業の中でどのように生かされているかを実証する、指導助言者として奈良女子大附属小学校の倉富宗人先生と千代宏先生を招請し毎年３回の指導を受けることであった。

先にも述べたように、昭和 53 年は美山教研のターニングポイントとなった年であった。研究主題の設定、授業公開、指導助言者の招請、示範授業、学び方学習など研究がダイナミックに展開し始めた年である。

倉富先生の幼・小・中一貫教育の考え方が本格的に導入され、「学び方学習」が研究の柱となったのである。

小嵐氏は一貫教育について次のように述懐している。「一貫教育は教育の基本である。」「学力向上と実践力を高めるためには一貫教育が最も適している。」「一貫教育でないとロスが多くなる。」「美山町の実態にあった児童・生徒の教育のためには学習指導法を幼・小・中一貫にすべきである。」

笠松氏は研究主題「協力して自ら学ぶ子どもの育成」の根底には、倉富氏の「自主・協同」の考え方が反映されていると述懐している。このように、美山教研は倉富氏の考え方が大きく影響しているのである。

「同じ中学校区内にある保育園、幼稚園、小学校、中学校が一体となり、子どもの学びの連続性、目標・内容の系統性、指導の継続性を踏まえ、意図的・計画的に一貫した取組を行う教育。地域と協働した教育を進めることを通して、子どもが地域の一員として、将来にわたって地域づくりに貢献できるようになることを目指す教育」これは、福井市育委員会が平成 17 年度から展開している学校教育方針「中学校区教育」の趣旨である。

「美山町という地域社会の実態にあった児童生徒の教育をどのように進めたらよいかについて研究し、その学習指導方法を幼稚園・小学校・中学校と一貫したものにすべきである。町内の 6 幼稚園、6 小学校、1 中学校が共通の研究主題を掲げ協力し合って研究し、実践し、その成果を発表し合う。」（あゆみ，1981，P. ２）これは、美山町教育研究会が昭和 49 年に掲げた自主研究の趣旨である。

両方に共通していることは、幼・保・小・中一貫教育ということである。ここで注目したいことは、近年の教育改革の中で強調されている幼・保・小・中一貫教育を美山町では昭和 48 年から目指し、昭和 53 年から本格的に取り組んできたということである。ここにも美山教研の先見性を見ることができるのである。

(３)その３ ― 地域学校

昭和 53 年 11 月 1 日発行の「あゆみ」創刊号の巻頭に当時の美山町教育委員会教育長山下五生氏が「研究実践記録発刊に寄せて」と題して寄稿している。

「美山町教育研究会発足以来、幼稚園、小学校、中学校一体となった研究体制の中で、美山町に立脚する教育研究・調査・児童生徒の連合事業の実施に積極的にご精進くださることに対して、心から深く御礼申し上げます。

特にここ数年、奈良女子大附属小学校倉富・千代両先生をお迎えして学習法の開発をめざし、教育研究実践にご努力いただき、自らの専門職としての指導力の昂揚を通じ児童生徒の人間性育成に努めてくださるお姿の尊さに感謝申し上げておりました。

今回過去昭和 53・54・55 年の三年間の研究実績をまとめ、美山教研の実態を把握しその反省の上に立って今後の進むべき方向を吟味検討されることは、将来の美山町の学校教育確立と進歩発展に大きく寄与するものと思っております。

（中略）

現在、青少年の非行化激増が大きな社会問題になっていますが、楽しくわかる授業の実践はこの非行を防止する第一の基本条件ではないかと考えています。元来子どもは決して悪いものではありません。授業がわからず勉強に打ちこめない日の積み重ねが、非行につながることも少なくないはずであります。児童生徒にとって 1 時間の授業はかけがえのない尊いものであります。

美山町は昔から農林業が主たる生業でしたが、現在農林業では生活の維持が出来ず、福井・大野市と町外に職を求めています。したがって町民の学校教育に対する関心度は極めて高く教育に対して非常に熱心であります。それはかかってわが子の豊かな成長と無限の可能性の伸長に大きな期待を寄せているからであります。これにこたえるには、先生方のお力を待つ以外にございません。町民の期待にこたえるべく益々教育研究とその実践に努力され、力を結集して美山町の学校教育の前進発展を心から切望してあいさつに代えます。」

ここに美山町の学校教育の全貌を見ることができます。

「幼稚園・小学校・中学校が一体となった研究体制」「美山町に立脚する教育」「自らの専門職としての指導力の昂揚」「児童生徒の人間性育成」「美山町の学校教育確立と進歩発展」「町民の学校教育に対する関心度は極めて高く教育に対して非常に熱心」「わが子の豊かな成長と無限の可能性の伸長」「町民の期待にこたえるべく…」「力を結集して…」

地域がこぞって子ども達の成長を願っているのである。そして、地域がこぞって学校に、先生方に全幅の信頼をおきその指導力に期待しているのである。先生方はその信頼と期待に応えるべく、美山町教育研究会を組織し研鑽を重ね、指導力を磨いてきたのである。教育委員会は先生方の努力に感謝するとともに先生方を、美山教研をしっかりと支えてきたのである。先に述べたように町当局もしかりである。

山下教育長の巻頭言が小嵐重郎右衛門氏の「美山の子どもを育てんことには…この思いの母体になったのが美山教研である。」「学校は親の夢を実現してくれるところ」と笠松悟氏の「美山では、地域が注目しているのは学校しかない。」「子どもに将来を託す思いが強い」にオーバーラップするのである。

福井市の前教育長渡邉本爾氏は「公立学校は「地域学校」である。「地域に根づく学校」である。そして、学校は「地域のシンボル」である。学校は常に「地域学校」として。その基盤を築き、地域と一体となる中で学校としての役割を果たすことができるのであり、好むと好まざるにかかわらず相互に影響し合う関係にあると言える。だからこそ、その営みを充実させることが、今後の学校教育に一層求められているのである。」（2009，建築が教育を変える，ｐ．53）と述べている。

美山町では、昭和 53 年頃から「地域学校」として存在していたのである。それは、山下教育長の言うところの町の置かれた状況や合併という難題を乗り切った経験などが「地域に根づく学校」を生んだのではないだろうか…。

おわりに

〇地域の理解と協力がなければ教育は成り立たない。
〇教育への理解を得るには何回も学校へ来てもらうしかない。
〇親をどのようにして学校へ寄せるかを常に考えていた。
〇父兄の働き場をうんと創る。働き場があると喜んで学校に来てくれる。
〇参観日を創って子どもを見てもらう。
〇大切なのは平素である。年２回の保護者会ではなかなか理解してもらえない。平素から学校へ寄せる機会をつくる。
〇親は子どもの姿を見て学校を評価する。

これは、笠松悟氏が聞きとりの途中で、ご自身の教員生活を回想してつぶやかれた言葉である。地域の理解や信頼を得ることが学校教育の基盤だということ、そのための方策を述べている。そして、「地域と一体となる中で学校としての役割を果たすことができるのであり、好むと好まざるに関わらず相互に影響し合う関係にあると言える。だからこそ、その営みを充実させることが、今後の学校教育に一層求められるのである。」という「地域学校」としての有り様を具体的に述べているものである。

「地域の方々が学校へ足を運ぶ機会をつくり、生徒・教員・学校が何をしているのか、活動そのものを見てもらおう。さらに、生徒が地域で活動する機会を増やし、地域で活動する姿を地域の方々に見えるようにしよう…。」これは、私が学校経営の柱の一つした「地域に見える活動」である。笠松氏のお話は、まさに森田中学校・至民中学校で自らが取り組んだ「地域に見える活動」と重なり合ったのである。

今、盛んに言われている「開かれた学校」「地域との連携」「地域と協働した教育」「地域で子どもを育てる」「コミュニティスクール」等々を美山町の学校では昭和 50 年代から実践していたのである。その母体となったのが美

山町教育研究会だった。

今回、私の地域連携のタネのありかとなった美山町教育研究会の実践を研究実践記録「あゆみ」と美山町教育研究会発足時の先生方への聞きとりなどなどを通して「美山町教育研究会」誕生の経緯や沿革を調べ、その存在意義（価値）さぐってみた。

美山町教育研究会の誕生の背景には「合併問題」があったのである。文化の異なる地域、学校、教員が新たに美山町の教育を、文化を、町民意識を醸成しなければならなかったのである。学校教育もその中核を担わなければならなかったのである。町の存亡が係っていたと言っても過言ではなかったのである。このことが「地域が一体となって子どもを育てる」文化をも生み出したのであった。

また昭和 48 年頃から、美山町教育研究会は、「授業研究」を研究の中核に据えるのである。それは、指導方法の刷新（学び方学習）であり子ども達に力をつけるためであった。幼・小・中が一貫した指導法で子ども達に力をつけていこうというのである。そこには、奈良女子大附属小学校の倉富宗人氏の「学び方学習」の考え方を導入し「幼・小・中一貫教育」を推進し、美山の子ども達の豊かな成長と無限の可能性を伸ばそうという教師集団の熱い思いを強く感じるのである。

さらに、美山の学校は、まさしく「地域学校」であるということである。

美山町教育研究会は、合併による町民融和に尽力し、保護者・町民の学校教育への期待にしっかり応えてきたのである。「信頼」しあえる関係が美山の教育文化を築いてきたのである。そして、学校は「地域のシンボル」として地域の誇りとなっているのである

こういった美山町教育研究会の先見性のある取組（実践）は、今、全国各地で進められている「一貫教育」、「地域で子どもを育てる」というこれからの学校づくりの参考にしていただきたい。いや、是非とも参考にしてほしいのである。なお、興味深い「学び方学習」「協同(集合)学習」などについては次の機会に取り上げたい。

[参考文献]

美山町教育研究会(1981). あゆみ(昭和 56 年度)
美山町教育研究会(1983). あゆみ(昭和 57 年度)
美山町教育研究会(1985). あゆみ(昭和 59 年度)
美山町教育研究会(1981). あゆみ(平成 10 年度)
福井県美山町(2006). 美山町 50 周年記念誌　美山 50 年のあゆみ
しみん教育研究会(2009). 建築が教育を変える-福井市至民中学校の学校づくり物語-